

平安和文会話文における準体句 — 助詞「も」後接の場合 —

土岐 留美江

日本語教育講座

Quasi-nominal Phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases with Postpositional Particle “mo” —

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “mo,” in comparison with those without postpositional particle, those with postpositional particle “wa” and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “mo”, verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception, verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “mo”, all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) appear.
- (c) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “mo”, past and perfect auxiliaries are frequently used, but some conjecture auxiliaries are also frequent.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases with postpositional particle “wa” and those with postpositional particle “mo.” In order to clarify the relationship between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending forms, it is necessary to examine their uses more extensively, including those accompanied by other postpositional particles.

1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究

がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がり、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存

在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p. 141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太（1996）では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐（2005）では、連体形終止法を終止形終止法やゾ、ナム共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐（2008）では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐（2009）、助詞「が」が後接するケースについては土岐（2010）、助詞「を」が後接するケースについては土岐（2011）、助詞「に」が後接するケースについては土岐（2012）、助詞「は」が後接するケースについては土岐（2013）で考察を行った。本稿では、助詞「も」が後接する準体句について分析を行う。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。本稿で引用した土岐（2007）の連体法のデータも同様の資料に拠っている。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐（2005）で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

3. 分析対象形式

土岐（2005）で考察した連体形終止については、地の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を分析した土岐（2008）や、助詞無し準体法および「が」「を」「に」後接の準体法を分析した土岐（2009）、土岐（2010）、土岐（2011）、土岐（2012）、土岐（2013）でも、同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、本稿で扱う「も」準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要がある。

4. 分析

4.1. 助動詞を含まない動詞準体句

「も」準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1およびグラフ1である。

最も多い動作・変化動詞と、感情・思考・知覚動詞の割合の差が非常に小さく、ほぼ拮抗している点で、「は」準体法より「が」準体法の分布に類似していると言えよう。しかし、存在詞の割合がこれまで見てきた連体法や連体形終止法、およびどの助動詞の準体法における分布よりも小さく、非常に少ないことが「も」準体法の特徴である。

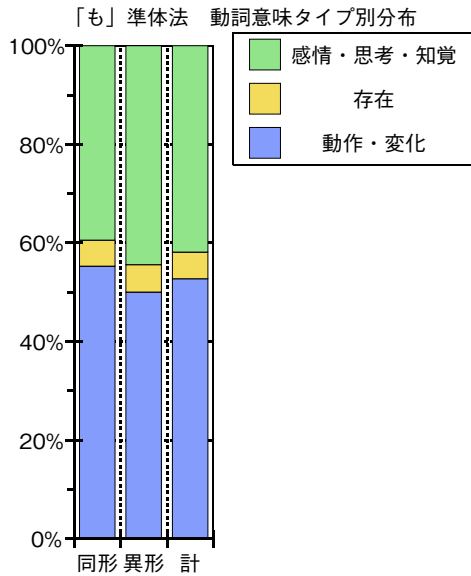
以下に比較のために、土岐（2013）から「が」準体法と「は」準体法のグラフを再掲する。

「も」準体法では、一番比率が高いのが動作・変化動詞であり、次が感情・思考・知覚動詞、一番比率が低いのが存在詞となっている。これは連体法の傾向と一致し、連体形終止法の傾向と比較した場合、動作・

表1 「も」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	21 (55)	18 (50)	39 (53)
存在	2 (5)	2 (6)	4 (5)
感情・思考・知覚	15 (39)	16 (44)	31 (42)
計	38 (99)	36 (100)	74 (100)

グラフ1



変化動詞と感情・思考・知覚動詞の割合が逆転しているが、先に述べたように、動作・変化動詞と感情・思考・知覚動詞の差は小さく、両者はほぼ拮抗している。

以下の表2とグラフ4に、同形活用語と異形活用語の計の数値を用いて、連体法、助詞無し準体法、「は」準体法、「が」準体法、「も」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法の分布を比較して示す。

最左端が連体法であり、次の無助詞準体法から、「は」準体法、「が」準体法、「も」準体法、「を」準体法、「に」準体法、連体形終止法と、感情・思考・知覚動詞の比率が高まっていき、ほぼそれに反比例するように動作・変化動詞の比率が下がっている。ただし、係り助詞「は」と「も」は他の助詞よりも動作・変化動詞の比率がやや高い。

連体法と無助詞準体法と「は」準体法および「も」準体法は動作・変化動詞の比率が最も高く、「が」準体法は動作・変化動詞と感情・思考・知覚動詞の比率が同率であり、「を」準体法と「に」準体法と連体形終止法は感情・思考・知覚動詞の比率が最も高い。準体法の分布は、無助詞から接続助詞の用法を持つ「を」や「に」へと、相互に連続性を有しながら、動作・変化動詞から感情・思考・知覚動詞へと比重がシフトしていくことが読み取れる。

以下に「も」準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

グラフ2

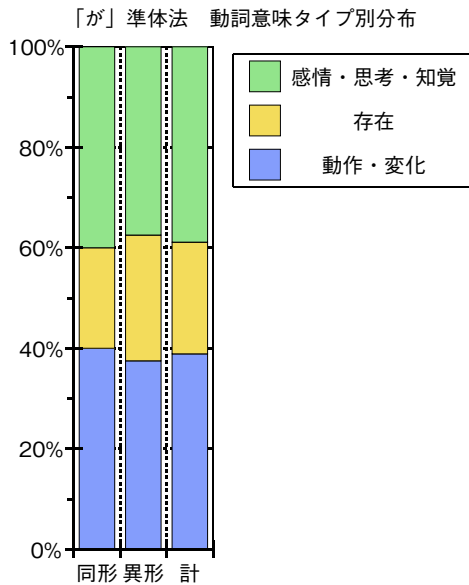
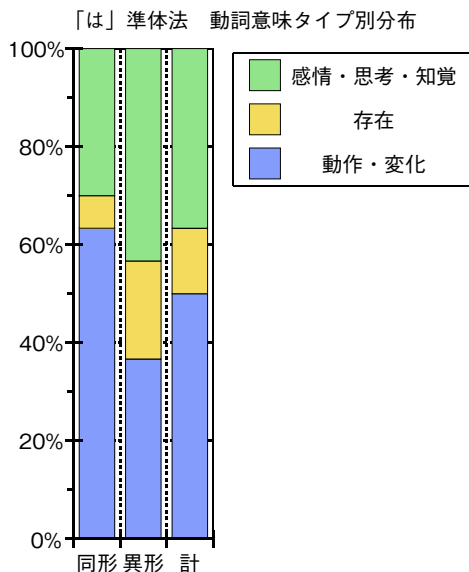


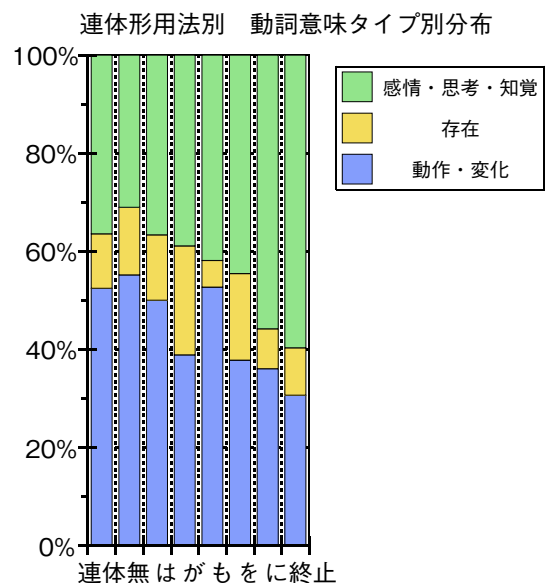
表2 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準無	準は	準が	準も	準を	準に	終止
動作・変化	731	16	30	7	39	45	31	19
存在	155	4	8	4	4	21	7	6
感情・思考・知覚	508	9	22	7	31	53	48	37
計	1394	29	60	18	74	119	86	62

グラフ3



グラフ4



4.1.1 動作・変化動詞

【同形】

- 1) (源氏) つゝむこと多かる事にて、はかなく人にたはぶれ言を言ふも所せう (1,138,6)
- 2) (左馬頭) 木の道の匠のよろづの物を心にまかせて作り出だすも、臨時のもて遊びもののその物とあとも定まらぬは (1,44,9)
- 3) (頭中将) はかなき花紅葉と言ふも (1,50,8)
- 4) (大宮) げにかうの給もことほりなれど (2,297,7)
- 5) (夕霧) 六位など人の侮り侍めれば、しばしのこととは思ふたまふれど、内へまいるも物うくてなん (2,316,10)
- 6) (源氏) 思ひかけぬ世界にたゞよふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつる (2,69,4)
- 7) (朱雀院) すべなきやうに人の思ひ言ふも、捨てたる身には思ひなやむべきにはあらねど (4,135,7)
- 8) (柏木) さすがにかゝづらふも、中へ苦しう侍れば、心もてなん急ぎ立つ心ちし侍る (4,23,14)
- 9) (帝) 若宮のいとおぼつかなく露けき中に過ぐし給ふも心ぐるしうおぼさるゝを、とくまいりたまへ (1,12,1)
- 10) (末摘花) 限りなき人も、親などおはして、あつかひ後見きこえ給ふほど、若びたまふもことほりなれ (1,215,10)
- 11) (侍従) かの聞こえ給ふもことほりなり (2,143,14)
- 12) (源氏) かく思ひかけぬ罪にあたり侍も、思ふ給へあはすることのひとふしになむ、空もおそろしう侍 (2,17,7)
- 13) (源氏) 桃園の宮の心ほそきさまにてもものし給ふも、式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを (2,261,4)
- 14) (女五宮) さらにへりてかくねんごろに聞こえ給ふも、さるべきにもあらんとなむ思ひ侍 (2,280,2)
- 15) (少弐) あやしき所に生ひ出で給ふも、かたじけなく思きこゆれど (2,335,4)
- 16) (乳母) かくあまたの御中に、とりわききこえさせ給につけても (3,215,13)
- 17) (御息所) この年ごろ、さるべき事につけて、いとあやしくなむ語らひものし給ふも、かくふりはへわづらふをとぶらひにとて (4,104,7)
- 18) (御息所) いと乱りがはしげにはべれば、渡らせ給ふも心ぐるしうてなん (4,108,14)
- 19) (玉鬘) かくてもものし給ふもさすがなる方にめやすかりけり (4,291,5)
- 20) (大輔) かゝるをとり物の、人の御中にまじり給ふも、世の常の事なり (5,140,12)
- 21) (右近) 瘦せおとろへさせ給ふもいと益なし (5,244,14)
- 22) (尼君) かくまでのたまはせ聞こえさするも、いかゞ (1,166,4)
- 23) (少納言の乳母) あやしうおぼしの給はするもいかなる御心にか (1,190,3)
- 24) (源氏) なずらひならぬ程をおほしくらぶるも、わるきわざなめり (2,208,12)
- 25) (大宮) よからぬ世の人の言につきて、きはだけくおぼしの給ふもあづきなく (2,297,14)
- 26) (右近) よからぬなま者どもの、あなづらはしうするも、かたじけなき事なり (2,350,1)
- 27) (源氏) 人のかたちは、をくれたるも又なを底ひある物を (2,369,1)
- 28) (源氏) 暑かはしきさみだれの、髪の乱るゝも知らで書き給ふよ (2,438,4)
- 29) (北の方) 大殿の北の方と聞こゆるも、他人にはや物し給 (3,119,7)
- 30) (源氏) よからぬ狐などいふなる物のたぶれたるが、亡き人の面伏せなること言い出づるもあなるを、たしかなる名のりせよ (3,371,11)
- 31) (老女房たち) かゝるおりのこと、わざとがましくもてなし、ほどの経るも、中へにくきことになむしはべりし (4,344,9)
- 32) (源氏) さしていとほしきことなき人の、さはやかに背き離るゝもありがたう、心やすかるべき程につけてだに (4,81,2)
- 33) (匂宮) 今は一夜を隔つるもおぼつかなきこそ苦しけれ (5,144,14)
- 34) (命婦による帝の言) いとゞ人わろうかたくなになり侍るも、先の世ゆかしうなむ (1,14,8)
- 35) (源氏) つれへに籠り侍も、苦しきまで思ふ給へらるゝ心のどけさに (3,163,8)
- 36) (冷泉院) 古めかしきあたりにさし放ちて、思落とさるゝもことほり也 (4,285,11)
- 37) (中将君) 宿直人のことなど言ひをきて侍も、いとうしろめたけれど (5,168,4)
- 38) (中君) いさや、いにしへの御ゆるしもなかりしことを、かくまで漏らしきこゆるも、いと口軽けれど (5,84,10)
- 39) (夕霧) ことなる事なきほどは、この院を見て久しくなり侍るもあはれにこそ (5,96,11)

4.1.2 存在動詞

【同形】

- 40) (母君) かくてをはしますもいまへしうかたじけなくなむ (1,13,3)
- 41) (内大臣) こゝにさぶらふもはしたなく (2,296,3)

【異形】

- 42) (源氏) 宮は並びなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ (3,187,14)
- 43) (時方) さらばのどかにまいらむ。立ちながら侍も、いとことそぎたるやうなり (5,269,5)

4.1.3 感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 44) (源氏) 人のうらみ負はじなど思ふも、世にながふありて、思ふさまに見えたてまつらんと思ふぞ (1,256,10)
- 45) (源氏) はかなき事にて人に心をかれじと思ふも、たゞひとつゆへぞや (2,106,6)
- 46) (源氏) 故院の御子たちあまたものし給へど、親しくむつび思はずもおさへなきを (2,120,13)
- 47) (侍従) またおほしわづらふもさることにはべれば (2,143,14)
- 48) (大宮) をろかに思ふもなきわざなるを (2,317,2)
- 49) (朱雀帝) 契り深き人のためには、いま見出で給てむと思ふもくちをしや (2,97,9)
- 50) (源氏) まして、こゝになどさぶらひ馴れ給を見るへも、はじめの心ざし変はず、深くねんごろに思きこえたるを (3,288,6)
- 51) (源氏) いかう思ひ捨てられ奉る身の咎に思ひなすも、さまへに胸いたうくちおしうなん (4,28,12)
- 52) (致仕大臣) おどろきくちをしがるも類に触れてあるべし (4,38,8)
- 53) (弁) げにかの嘆かせ給めりしもしるき世の中の御ありさまを、ほのかにうけたまはるも、さまへになん (5,86,14)
- 54) (源氏) その言ふかひなき御心のありさまの、あはれにゆかしうおほえたまふも、契りことになむ心ながら思ひ知られける (1,184,3)
- 55) (帝) 通ひて見え給ふも似げなからずなむ (1,23,8)
- 56) (源氏) げにかくあはめられたてまつるもことばりなる心まどいを (1,68,11)
- 57) (侍従) 中に見たまふるも心ぐるしくなむ (2,143,15)
- 58) (弁) とぶらひ数まへきこえ給も、見え聞こえずのみなりまさり侍めるに (4,318,2)

【異形】

- 59) (源氏) 心のどかにて、親はらからのもてあつかひうらむるもなう心やすからむ人は、なかへらうたかるべきを (1,212,3)
- 60) (源氏) 浦もなくおほゆるも、かつはあやしうなむ (2,151,6)
- 61) (源氏) はるかに思ひ出づるも心ほそきに、うれしき御声かな (2,262,15)
- 62) (源氏) すき者どものいとうるはしだちてのみ、このわたりに見ゆるも、かゝるものくさわひのなきほどなり (2,365,9)
- 63) (源氏) たゞいまはきびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや (3,45,4)
- 64) (御息所) この二日三日許見たてまつらざりけるほどの、年月の心ちするも、かつはいとはかなくな

む (4,108,15)

- 65) (中君) やうへかう起きみられなどしはべるが、げに限りありけるにこそとおほゆるも、うとましよう心うくて (4,358,1)
- 66) (姫君たち) 来し方を思つゞくるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど (4,365,2)
- 67) (源氏) 見たてまつりそめしよりあはれに思ひきこゆるも、あやしきまでこの世の事にはおほえ侍らぬ (1,181,1)
- 68) (源氏) まだいとたゞよはしげなりしを、見捨てたるやうに思はるゝも、いまさらにいとおしくてなむ (3,380,12)
- 69) (薫) いひしへの事と聞き侍も、物あはれになん (4,320,13)
- 70) (御息所) いたうれしう浅からぬ御とぶらひのたびへになり侍めるを、ありがたうもと聞こへ侍も、さらばかの御契りありけるにこそはと (4,35,12)
- 71) (源氏) はれより後の人へに方がたにつけてをくれゆく心ちしはべるも、いと常なき世の心ほそきののどめがたうおほえ侍れば (4,80,5)
- 72) (源氏) いま静かにと思ひ給ふるも、げにこそ心をさなきことなれ (4,82,10)
- 73) (夕霧) 心ぐるしき御なやみを、身にかふばかり嘆ききこえさせ侍も、何のゆへにか (4,93,9)
- 74) (弁) 行き帰りの中宿りには、かくむつびらるゝも、たゞ過ぎにし御けはひを尋ねきこゆるゆへになんはべめる (5,115,10)

4.2. 助動詞を含まない形容詞準体句

「も」準体法の形容詞の例について、形容詞の意味についてA B Cの類型を立てて考察した吉田 (1995) にならない、A情意的(感情形容詞、評価形容詞)、C属性的(次元形容詞¹⁾、色彩形容詞、その他)、その中間的なB(否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞)という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価の意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の表3である。

A(情意的)とB(中間的)とC(属性的)のすべての類型が現れ、かつプラス評価的な意味を伴う形容詞もマイナス評価的な意味を伴う形容詞もともに現れる。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見られず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、すべてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容詞の評価の意味合いは「良し」1例を除き、すべてマイナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、A B Cすべての類型が観察され、またプラス評価的意

味合いを含む形容詞も豊富に見られた。(土岐(2005、2008))

以上の結果を比較すると、「も」準体法は、土岐(2010)土岐(2013)で述べた「が」準体法や「は」準体法の場合と同様に、連体形終止法よりは連体法との共通性の高さを示す結果となっている。

また、動詞節に対する形容詞の出現率を見てみると、「も」準体法は30%(動詞節74例、形容詞節22例)となっている。土岐(2009)、(2010)、(2011)、(2012)、(2013)の結果と併せて、他の用法と比較すると、「が」準体法が29%(動詞節21例、形容詞節6例)、助詞無し準体法は14%(動詞節29例、形容詞節4例)、連体形終止法29%(動詞節62例、形容詞節18例)、連体法113%(動詞節1394例、形容詞節1573例)、「を」準体法27%(動詞節119例、形容詞節33例)、「に」準体法33%(動詞節86例、形容詞節28例)、「は」準体法20%(動詞節60例、形容詞節12例)である。

「も」準体法は、「を」準体法や「が」準体法の場合と同様に、連体法よりは連体形終止法との共通性の高さを示していると言えよう。係助詞である「は」準体法よりはやや形容詞節の比率が高く、「が」準体法に最も近い数値を示している点が興味深い。

連体法と終止法の場合については形容詞の総出現数が多いため、分析の便宜上、対象としたのは6例以上出現した形容詞に限定しているが、準体法の場合は形容詞の総出現数が少ないため、現れたすべての形容詞を扱っている。そのため、厳密な意味での両者の比較は難しいのであるが、以上の結果から、おおまかに「も」準体法の形容詞については、「が」「を」「に」「は」な

どの他の助詞の準体法形容詞と同様に、意味の類型の観点からは連体法に近く、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法に近いという特徴を示していると言えよう。

以下に「も」準体法形容詞の全用例を示す。

【同形】

用例なし。

【異形】

- 75) (惟光) この主とおほしきもはひ渡る時はべかめる (1,111,5)
- 76) (頭中將) たゞうはべばかりのなさけに手走り書き、おりふしのいらへ心得てうちしなどばかりは随分によるしきも多かりと見給れど (1,34,11)
- 77) (左馬頭) おほかたの世につけて見るには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らん、多かる中にもえなん思ひ定むまじかりける (1,38,9)
- 78) (左馬頭) をかしきもあり (1,44,11)
- 79) (頭中將) この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれとつゝに思ひ定めずなりぬるこそ (1,56,3)
- 80) (内大臣) いとさくじりおよすべたる人立ちまじりえてをのづからけ近きも、あいなきほどになりたればなん (2,303,5)
- 81) (源氏) いままでおぼつかなきもかひなきことになむ (2,358,8)
- 82) (源氏) よきもあしきも世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを (2,439,4)
- 83) (源氏) よきもあしきも世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを (2,439,4)
- 84) (源氏) 都離れし時より、世の常なきもあぢきなう (2,69,7)
- 85) (源氏) かく古めかしき身の所せさに、思ふに従ひて対面なきもいとくちおしくなん (3,238,10)
- 86) (源氏) よしとて、又あまりひたゝけて頼もしげなきも、いとくちおしや (3,289,5)
- 87) (夕霧) さがなくことがましきも、しばしはなまむつかしうわづらはしきやうに憚るゝことあれど (4,142,13)
- 88) (源氏) 年経ぬる人にをくれて、心おさめむ方なく忘れがたきも、たゞかゝる仲のかなしさのみにはあらず (4,196,11)
- 89) (少將) つらきもあはれ、といふ事こそまことなりけれ (4,271,2)
- 90) (薫の文) うちつけなるさまにやとあひなくとゞめ侍て、残り多かるも心ぐるしきわざになむ (4,323,10)
- 91) (弁) 思ふ人にをくれ給ぬる人は、高きも下れるも、心の外に、あるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多く侍めれ (4,403,2)
- 92) (薫) うきもつらきも、かたべに忘れ給まじ

表3 「も」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	4	B	0
高し	2	C	0
つらし	2	A	-
悪し	1	A	-
憂し	1	A	-
多し	1	C	0
おほし	1	A	+ -
おぼつかなし	1	A	-
～がたし	1	A	0
心許なし	1	A	-
ことがまし	1	A	-
近し	1	C	0
嘆かし	1	A	-
短かし	1	C	0
良し	1	A	+
よろし	1	A	+
をかし	1	A	+

計22例

- くなん (4,407,11)
 93) (薫) うきもつらきも、かたへに忘れ給まじく
 くん (4,407,11)
 94) (大君) あす知らぬ世のさすがに嘆かしきも、たが
 ためおしき命にかは (4,448,9)
 95) (中将君) 高きも短きも、女といふものはかゝる筋
 にてこそ、この世、後の世まで苦しき身になり侍
 なれと (5,152,8)
 96) (中将君) 高きも短きも、女といふものはかゝる筋
 にてこそ、この世、後の世まで苦しき身になり侍
 なれと (5,152,8)

4.3. 助動詞を含む準体句

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について、総数が多い順にまとめたのが次の表4である。助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

ナリの場合、終止・連体同形の活用語につくナリは対象から除外した。以下に示した終止ナリと連体ナリは終止・連体異形の活用語につくものである。また、非活用語につくナリを以下では体言ナリとしてある。

また、助動詞自体の活用が終止・連体同形のもののは網掛けで示してある。

助動詞の用例総数は「は」準体法の場合と同数である。「は」準体法と同様に、終止・連体同形の推量助動詞ムが最も多く、全体のおおよそ半数近くをしめてい

る。しかし、「は」準体法では、2番目に多い助動詞として、終止・連体異形の否定の助動詞ズがきていたが、「も」準体法の場合は過去の助動詞キが2番目に位置している。ただ、それ以外の点では、おおよそ「は」準体法の分布と同様の傾向を見せており、過去・完了系の助動詞が比較的上位に現れるが、推量の助動詞との明確な序列が認められるほどではないようである。

5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の「も」準体句のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
 - 1 動作・変化動詞
 - 2 感情・思考・知覚動詞
 - 3 存在詞

の順に多い。存在詞の割合は、連体法や連体形終止法、および他の助詞が後接する準体法の中でも最も低い。

2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型は
 - A 情緒的
 - B 中間的
 - C 属性的形容詞

のすべてが現れる。

また、評価的意味を有する形容詞の場合、プラス評価の意味合いを持つものと、マイナス評価の意味合いをもつものとがともに現れる。この点は「は」準体法等と同様である。

3. 助動詞を含む準体句の場合、最も多いのが推量のムである点は「は」準体法と同様であるが、次に多いのが過去のキである点が異なっている。それ以外では、過去・完了系の助動詞が多い傾向はあるが、推量系の助動詞との明確な序列は認められない点で「は」準体法と同様の傾向を示している。

本稿では係助詞「も」が後接する準体法について考察を行った。今後も引き続き、他の助詞が後接する場合の準体法の分析を進め、それらの結果も併せて準体法の位置について考察を行う。

注

1. 吉田 (1995) によると、せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、ひろし、ほそし、ちひさし
が例示されている。

表4 「も」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	67
キ	20
タリ	12
ベシ	10
体言ナリ	7
リ	7
ケリ	6
ズ	5
ヌ	4
メリ	3
ラム	3
ケム	2
ツ	2
終止ナリ	1
マシ	1
ラル	1
ル	1

計152例

主要参考文献

- 尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」 森岡健二他編 『講座日本語学2 文法史』 明治書院1-19
- 同 (2001) 『文法と意味I』 くろしお出版
- 小池清治 (1967) 「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」 『国文学 言語と文芸』 54、12-21
- 近藤泰弘 (1986) 「〈結び〉の用言の構文的性格」 『日本語学』 5-2、22-30
- 同 (2000) 『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房
- 同 (2001) 「名詞節と項構造」 『日本語文法』 1-1、41-52
- 信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」 『国語学』 82、29-41
- 同 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」 『近代語研究』 7、121-139、武蔵野書院
- 同 (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」 『神女大國文』 7、172-189
- 同 (2006) 「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—一句構造の観点から—」 『神女大國文』 17、29-44
- 土岐留美江 (2005) 「平安和文会話文における連体形終止文」 『日本語の研究』 1-4、16-31
- 同 (2008) 「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」 『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 57、55-62
- 同 (2009) 「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」 『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 58、31-39
- 同 (2010) 「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後接の場合—」 『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 59、15-23
- 同 (2011) 「平安和文会話文における準体句—助詞「を」後接の場合—」 『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 60、(ページ数)
- 同 (2012) 「平安和文会話文における準体句—助詞「に」後接の場合—」 『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 61、(ページ数)
- 同 (2013) 「平安和文会話文における準体句—助詞「は」後接の場合—」 『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 62、(ページ数)
- 山内洋一郎 (1959) 「院政期の連体形終止」 『国文学攷』 21、240-250、広島大学国語国文学会
- 同 (1963) 「奈良時代の連体形終止」 『国文学攷』 30、33-41、広島大学国語国文学会
- 同 (1964) 「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」 『広島大学文学部紀要』 23-3、125-152
- 同 (1970) 「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」 『国文学攷』 54、55-58、広島大学国語国文学会
- 同 (1992) 「平安時代の連体形終止」 井上親雄・山内洋一郎編 『古代語の構造と展開』 25-44、和泉書院
- 同 (1997) 「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」 『文教国文学』 37、1-8
- 同 (2003) 『活用と活用形の通時的研究』 清文堂出版
- 吉田光浩 (1995) 「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」 宮地裕・敦子先生古希記念論集刊行会編 『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』 112-145、明治書院

(2013年8月2日受理)